

り規模が大きく、数個大隊に編成され佐官級の将校が多かった。

濟南は氣候がよく、内地と差があまりないように感じた。北京に近いただけあり治安もよく、鉄砲の音など聞こえない。

軍医大尉の当番を命じられ約一年余り勤務した。大尉は水にうるさく、煮沸、煮沸の毎日だった。佐官クラスはアパート式の官舎に住み、軍曹が炊事を賄っていた。昭和二十年一月末に中隊に復帰、演習、衛兵の明け暮れの毎日だった。空襲も敵襲もなく、戦闘の死角にいるような気がした。

八月十五日、ポツダム宣言受諾、濟南―上海間を貨物列車で一カ月かかって集結。米三升、砂糖、缶詰は濟南で支給になる。

昭和二十一年三月、博多へ上陸。三月十五日帰京。弟は海軍に志願、呉海兵団に勤務、昭和二十年九月に復員していた。

昭和二十一年十一月に結婚、娘が二人いる。一

人は同居しているが、一人は結婚して鹿児島にずっと住んでいる。

家内は平成十二(二〇〇〇)年に死去した。

内地の延長のような戦地勤務だったが、大戦争、大戦闘の中にもこのような勤務があったということも軍隊の一面であろう。

和田山の街を歩いてもかつての兵隊仲間は見当たらず淋しい限りだ。

残り少ない余生を大事にしたいと思う。

行くも残るも悲惨

歩兵第三十一連隊の仲間

岩手県 菊池 政男

私は、大正六(一九一七)年三月二十一日、岩手県金ケ崎町に農家の長男として生まれ、三度の

召集（第一回は現役兵と同じ）を受けたが、満州・北支・本土防衛と勤務を続け、幸いにして生還することができた。現在八十五の歳を保ち農業の現役として活動している幸せ多き元軍人であります。

我が原隊、弘前歩兵第三十一連隊関係者のご縁を得て、平成十（一九九八）年、ロシアの街ウラジオストツクからシベリアを北上、ロシアの街グロデコウから国境を山越えして、中国の国境の街綏芬河、綏陽に入った。同行十五人の老兵のうち、誰一人も観光のつもりの人はなく、皆の心が踊っていた。

ソ連軍進攻により不運な一生を終えた人々、そして、昭和二十（一九四五）年、我が原隊、第八師団（杉兵団）の将兵が、フィリピン戦において、あるいは海没し、上陸し得た戦友は護国の鬼となり戦没しているのである。この機会を逃がさじと、大正六年生まれの私も一戦友として、この悲劇を後世に伝えるため、私は、社団法人元軍人

軍属短期在職者協力協会の一員とし、労苦聞き取り事業に参加したのであります。

冒頭申した如く、私は農家の長男として生まれ、学校卒業後、第一補充兵として召集を受ける前の六月より九月までの三カ月、鉄道員として勤務したのである。私が入隊したのは、補充兵召集の始まりで、現役兵から三カ月遅れの入隊である。

後に聞く話であるが、初年兵は、鬼より怖い古参兵からビンタを取られるとのこと、不安の入隊でしたが、郷土部隊であり、また東北人の温かさのためか、初年兵の私達に対してのビンタ、私的制裁などほとんどなく、家族的な扱いを受けていた。

昭和十三年九月、弘前の留守隊入隊、三カ月後の十一月までに一期の検閲が終わわり、歩兵第三十一連隊のいる満州へと出発した。十一月ともなれば寒さが厳しくなって来た。特に上陸したのは朝

鮮の羅津である。寒さは青森の比ではなく厳しいものであった。満州では検閲は無く、直ぐに勤務や国境警備につき、歩兵第三十一連隊第三大隊です。観月台という陣地だった。ここは芬^{フィン}綏^{スイ}河^カ北の陣地であった。

各陣地はそれぞれ「千早」とか「赤坂」とかの地名がつけられ、千早陣地は水も豊富で、敵に包囲されても大丈夫だった。また食糧も充分であった。その後、本隊の第三十一連隊が比島へ転進し、終戦前は混成部隊になったと後に聞いた。

その後、歩兵第三十一連隊は新兵舎ができたので移ったが、私は、昭和十六年三月召集解除となったのだから、私の勤務は二年半程で内地へ帰還したのである。

家に帰り、農業をしていたが、昭和十七年五月、再召集された。大東亜戦開戦半年で再び軍隊に復帰したが、今度は中国北部の山西省で、第六十九師団（勝兵団）であり、この師団も第八師団

同様の東北部隊であった。山西省は共産八路軍との戦闘が多かった。従って、蒋介石軍との戦闘より共産軍との戦いが主であった。山西省は各地に陣地を散在させているので、陣地の兵力は少なく、途中で襲われたり、包囲される。共産軍は日本軍が強ければ攻めず、兵力が少ないと襲撃したり包囲するのである。

勝第五二二八部隊は独立歩兵第十八大隊であり、伊藤晃大尉が大隊長であった。この地域（山西省）は鎮（郡）に一個小隊位を警備に駐屯させている。共産軍は小数と見ると襲撃するので、警備隊は援軍を出動させるのである。

聞く所によると元日本軍人が八路軍の共産軍の大佐となつていたりとかであるが、我が警備隊も住民と仲良くして情報を取って、八路軍に襲われたい所もあったとか。しかし、我軍は、分哨が囲まれ（敵五〇〇人）苦戦したとか、数人が戦死傷をしたとか、応援軍が敵に大打撃を与えたとか、とにかく、我軍が強ければ敵は来ない。弱い（兵力

が少ない」と襲撃するという状態である。

私は昭和十八年八月、召集解除となったが、終戦まで残った人もいた。しかし、私は内地に帰ったが、昭和二十年四月、三度目の召集があり、鹿児島島の近くで勤務し、続いて天草の海岸で敵の上陸を防ぐため警備・陣地を守っていた。

食料は割合あったが、兵器は余り無かった。しかし、マッチ箱位の火薬で、軍艦も吹き飛ばす兵器ができたとか、今思えば原子爆弾の話だったのか、種々な情報が入って来た。終戦の玉音放送は出先の陣地なので直接聞かなかったが、終戦のこととは聞いた。食糧は米の御飯を食べていたが、我々は熊本県の八代へ引き揚げて行き、十一月まで残務整理などし十一月に列車で帰るのを待っていた。

一般の人は外で炊飯をして列車の出るのを待っていた。大隊長は四国の人で、一個分隊の兵隊と一緒になので、皆より遅れて、十一月に帰ったのだ

から、他の兵隊より一カ月遅れて帰った。

何しろ九州から岩手県までだから随分遠い道程であったが家の方は大体大丈夫であり、家の者も、他人と違って安心していたようだ。私は家が農家であり、六原で養鶏をやったりしたが、農地を借りて入植者を受ける準備をし、自分も野菜栽培をし、今は老夫妻と子供・孫の六人と生活している。

そのように安定はしているが、宍戸次夫という方の勧めで、ソ満国境の陣地を、もう一度駆け巡ってみないかとの誘いがあった。参加者は八十歳前後の老齢者ばかり、中には脈拍が時折止まる者や、手術によって胃を三分の一も取り去った者も参加を申し込まれた。

元、国境（ソ満）守備隊の老兵が多く、第三十一連隊（第八師団歩兵第三十一連隊・弘前）関係者が十人、第二百野砲連隊一人、綏陽陸軍病院一人、東寧国境守備隊一人、綏陽県公務員一人、協

和会一人の十五人である。私も宍戸氏の話に応じ、第三十一連隊員の一人として参加したのである。

終戦時近くのある時、忘れもしない昭和二十年八月、百万を超えるソ連機甲部隊が突如ソ満国境を越えて満州へなだれ込んできた。ソ連の満州進攻である。当然、全満州は未曾有の混乱状態に落ちた。私は、九州の本土防衛に三度目の召集を受けて天草にいたから、そんな状態は知るよしもなかった。この当時の描写は、今回の訪中旅行の企画者、宍戸次夫氏で、当時、満州国境の街の警察官であった。同氏の記述を次に続けて記してみる。

『夜が明けると、空は大きな鷲のようなソ連の飛行機が、二機、三機と、時折、機銃を加えながら我が物顔で飛んでいた。遠くからの砲声は韻々と聞こえてくる。国境を突破したソ連軍機甲軍団が地響きを立てて街に迫っていた。日本人はまさ

かと、関東軍を信頼して誰もが二日か三日で戦いは終わって、またここへ帰ってくると、そう信じていたというより、かるくそう思っていた。だが戦局は思いもよらぬ情勢となっていた。

全満州の国境はソ連の狙撃兵団と機甲軍団で埋めつくされ、国境の陣地は次々に攻略され、守備していた日本軍は玉砕、或は壊滅状態で四散した。かろうじて生き残った兵は住民と共に敗走の憂き目を見たのである。』

綏陽の警察にいた宍戸氏も命からがら山伝いに逃げ延びたが、五十年前は夢のようである。

『あの潮のようなソ連軍団が、どんな所から攻めて来たのであろうかと、今になって思えてくると思った』と、今回の訪中の途次、そう述懐しておられた。

歩兵第三十一連隊は岩手の郷土部隊である。出動命令を受けて軍旗と共に弘前を後にしたのが、昭和十二年十月、満州に渡った。初めは牡丹江液

河に駐屯したが、間もなく駐留地を、国境の最前線寒葱河に移して露営したところである。この寒葱河が北滿での最初の駐留地だった。五千人ちかくもここに天幕で六カ月も生活した懐かしい所であると言う。この土地が、よくもこんな広い土地が残されていると、皆感慨無量で、しばし何かと語り合つて時を過ごした。

綏芬河の街の上に「靖国山」がある。この陣地では、ソ連進攻時には、松山省三少尉の指揮する七十五人の将兵がソ連兵と激突、その激戦で爆破された陣地の残骸やトーチカが、山伝いに累々と今でもあるところなので、手を合わせつつ、ゆうに一時間は見て歩かねばならない所なのに、無知な誰かが、下りようと声を掛けて十分程で早々下りてしまい、冥福も祈らず心残りであった。

次の日は早めに出発して天長山に向かった。靖国山から天長山は真正面に見える。第二百七十一連隊第三大隊、石島大隊長以下三百人の守備した陣地である。ソ連軍が国境を越えて綏芬河に進攻

して来た時、綏芬河の一般市民、婦女子を乗せて、最後の避難列車が出発しようとしていたその直前、ソ連戦車の砲撃にあい、走行不能となつた。

綏芬河街長、石田警察隊長、高石協和会事務局長、ボクラグリルを経営していた在郷軍人分会長は、列車から婦女子を誘導して天長山に避難した。その時の人数は、一般人百五十人、在郷軍人二百人程であったという。天長山守備隊長は、避難して来た市民婦女子を全員収容してソ連軍と一週間も戦い、全滅したことは知られている。四、五人の脱出者によつてこの状況が知らされた。(ソ連兵も合わせて、千人程も死んだ。ここを縦断して見るなら、恐らく未だに遺骨が点在しているのではないか。合掌)

観月台は悲劇の陣地でもある。新たに投入された第二百七十三連隊第三大隊(土榮榮太郎大尉)が指揮を取り、五百人足らずの兵が、各陣地に分

散して、順天山（千早山）、平頂山、暁天台、物見山、剣山、一撃山、誠山、尾峰、鷲周山、信山等、陣地で戦ったが、殆ど全滅に等しい悲劇を生んだ。

私や紫波町の水本雅志さんがいた所で、そう遠くないから歩いて行こうと、数人で歩き出したが、後に続く人が少なく引き返してしまった。私も実は歩くのが疲れて、付いて行けず心残りであった。もう二度と行ける所ではなかったのに、残念であった。

順天山陣地も僅かな兵でよく戦った。ソ連の狙撃師団は北から順天河を渡り後方に迂回し、同時に正面よりも来攻、戦車、自動砲などで猛烈な攻撃を受けて玉砕した。第十一中隊正分満見習士官以下二十五人、脱出者五人。

暁天台は、紫波町の熊谷武三さんがいた所で心残りであった。ソ連来攻時には、横溝正吉見習士官以下四十人。午前五時過ぎより敵戦車などの攻撃を受けて、多数の戦死者を出した。脱出者は六

人。

ここから綏陽までは三〇分程、途中の俗称「かど岩」は是非写真に収めたい所である。「かど岩」の演習地は、将兵の「たこつぼ」と払暁攻撃が思い出される。「かど岩」の向い側に広い演習地があつて、将兵は「たこつぼ」を掘って中に入つて払暁を待つのである。

綏陽駅から綏陽陸軍病院が見えるが、ソ連進攻時、重病患者約六十人を防空壕に収容して、また来るつもりで鍵をかけて、そのままになった悲劇の防空壕がある。聞いてみると近所の古老は、その話は聞いたことがあるが、場所は分からないと首を振った。

「戦友よ安らかに半世紀ぶり旧満州訪問の写真入り記事」

『綏西部隊に「動員下令」が下ったのは、昭和十九年七月七日である。この動員下令は、大本営が起死回生を図って発動した。いわゆる「捷一

号作戦命令」による満州全般にわたる大々的なもので、関東軍を骨抜きにしたほどの大移動だった。綏西部隊将兵が、兵舎をがら空きにして、秘密裏のうちに一夜で出動した。行く先は朝鮮の釜山だった。

釜山に到着するとすぐ始まったのは遭難訓練だった。将兵はお互いに暗黙のうちに、南方へ行くことを意識するようになった。乗船を待つ間、水泳の訓練は勿論のこと、魚雷攻撃を受けた時甲板から飛び降り訓練、縄ハシゴから海上に避難訓練、竹筏の組立て訓練などしているうち、八月十五日、いよいよ第八師団主力は「玉二五」と名付けられた輸送船団一九隻の大編成で第三十一連隊は「永治丸」と「福命丸」に分乗、外に護衛艦七隻に守られ門司を出港した。

連隊本部と、第一大隊は貨物船「永治丸」に、他の隊も「福嶺丸」「南嶺丸」などに乗船出港した。九月六日午前三時頃、早々突如大きな激震と同時に火災が発生した。敵の魚雷を船首部分に受

けたのである。

甲板上は退船命令により海面に飛び込む者、右往左往する者、甲板うえの蒸気配管の破裂に逃げ惑う者、指揮命令の不徹底に船上は修羅場と化した。

混乱を極めること十数分、敵魚雷の二発目が船体中央に直撃して船倉は大音響を発して爆発した。自分は爆風の煽りで海面に飛ばされて波間に失神してしまった。

それから数分過ぎたであろう。気がついてみたら、救命胴衣は確実、段々に意識が戻る。両手両足もある。怪我もないとわかったら急に勇気が湧いて来た。自分が乗っていた「永治丸」の船尾が、炎を上げながら沈もうとしていた。沈んで行く「永治丸」から、つとめて遠ざかるようにしながら泳いだ。明け方になって「永治丸」は東支那海の海底に姿を没していった』

満州に残った綏陽陸軍病院部隊約百五十人程、

三個小隊に分かれて牡丹江に向けて撤収行軍に移った。看護婦は白衣を脱ぎ正規の従軍看護婦の制服に着替えていた。歩ける患者も交えて綏西の駅近くにさしかかった時、待ち伏せしていたソ連軍と遭遇、兵器を持たない無防備の衛生兵隊はなすすべもなく、敵の銃撃にさらされ半数以上の死者を出すに至ったという。看護婦乙女たちの多くも、この綏西駅近い山かげで従軍看護婦の正装を血に染めて落命した。

まとまった部隊が出発した後、三〇分程遅れて細井准尉と兵一人、軍属一人との三人が部隊の後を追っていた。十分程歩いた時、後方より一台のトラックが来て、綏陽部司令部最後のトラックとか、幸運にも便乗させてもらった。トラックの進行先に行軍する病院部隊がいた。手を振り振り挨拶の声をかけて通過した。これが綏陽陸軍病院（第七六九部隊）を見た最後である。間もなく綏西入口にさしかかった時、前方丘よりソ連戦車の砲弾が唸りをたてて飛んできて、後方からの部隊

も砲撃にさらされ薄暮の綏西は修羅場と化したという。

綏陽陸軍病院の部隊はここで四散状態となり、まちまちに真つ暗な山中を個々に彷徨い歩き、生き延びた者は、牡丹江、東京城、敦化にたどり着いた。ある者はソ連軍に投降してシベリア送りとなり数年も抑留され、ある者は中国軍に捕囚され医務の手伝いなどして生き延びて、十年も遅れて帰国した者もいる。ある者は捕囚の身から脱走して民間に潜んで食を得るなど、満州難民と同じ悲惨な道を辿っていた。

綏陽陸軍病院、総数約二百人中、帰還九十三人、死亡三十一人、生死不明五十三人、みんなによくしてあげても、戦うことを知らない乙女たち、看護兵の末路。慟哭の外ない。

悲壮なり、第二百二十四師団

第八師団が南方に移動した後、ソ連国境の綏陽周辺の警備は、僅かに残された部隊を基幹とし

て、他隊から寄せ集めて第百十一師団が編成され、第八師団の任務を継承していた。

しかし、昭和二十年一月、新たに第百二十四師団が創設されて、綏陽付近の警備はこの第百二十四師団が担当し、百十一師団は濟州島へ行つた。

このように入れ代わつた。一方ソ連では、満州に侵攻すべく夥しい、強力な機甲軍団が国境に集結していた。

忘れることのできない八月九日、ソ連軍は日ソ不可侵条約を破つて、ソ満国境を越え百六十万にものぼるソ連機甲軍団が満州に押し寄せて来た。

この大軍に、装備の貧弱な第百二十四師団はまともにもぶつかった。師団編成も未だに整わないうちであつた。師団長は椎名正健中将である。

しかも、国境正面に集結したソ連軍団は、昭和十六年に増強された（関特演により）関東軍の精鋭を予想し、日本軍の力を過大に評価して重装備の機甲軍団と狙撃師団等の大兵力を投じ、満州に侵攻を開始したのである。これに対しわが第百二

十四師団は創設早々であり、朝鮮兵を交えた、火力、兵力、装備も貧弱のまま、怒濤のようなソ連軍団と東部国境で真正面に対決した。

暁天台から綏芬河に至る約六〇キロの山岳地帯の第一線には、強固な半永久陣地もあつたが、兵力、装備の大半を抽出され、防衛力の弱体化は如何ともし難く、天頂山、観月台などは幾日か戦い支えたものの、外の二十余个所の陣地はその朝までに殆ど撃破されてしまった。

師団長は関東軍の収縮配備計画のもと、師団司令部を稷稜に移し、綏陽、綏西、綏南、綏芬河、東寧等の兵力の大部分を稷稜に集結して、第二防衛線を稷稜に展開した。稷稜は綏陵と牡丹江のちようど中間にある街で、前後は広大な丘陵が続き、野戦陣地を敷くのに都合の良い地形で、その西側台地に野戦陣地の築城を進めた。防衛態勢は遅々として進まぬ中に、第一防衛線を突破したソ連軍は怒濤のように稷稜に押し寄せてきた。ソ連軍は早くも十二日朝、第百二十四師団主力のある

稷稜陣地に猛攻撃を開始、十三日夜半までに稷稜野戦陣地はすべて突破され、各部隊は小豆山に集結して態勢を整えて戦ったが、ソ連軍との激突、苛烈な戦いに壊滅に近い状態にまでなった。

師団所属の各隊将兵の多くは壮烈な戦死、しかも、二日間の戦鬪で四人の連隊長は戦死した。

第二百七十三連隊長 瀬尾 浩大佐

牡丹江重砲兵連隊長 額野哲三大佐

第二百七十二連隊長 石川栄治大佐

野戦重砲兵第二十連隊長 松村 精大佐

第二百二十四師団長椎名正健中将は、残り少ない将兵を集め、全員玉砕の切り込み態勢を整えている時、上層軍の後退命令を受けて残存部隊をまとめるに至った。同師団は敗色濃い前戦を知りながらよく戦った。慟哭の思いである。

南方転出の第八師団も、転進途上「福嶺丸」

「永治丸」等の座礁・沈没。比島戦場に着いては、敵弾と飢餓と、マラリア等に襲われ、帰れた人は

どれ程であるか。比島方面作戦に参加した陸海軍部隊六十三万。その損害四十七万余である。もし、第八師団が綏陽に残ってソ連軍と戦ったなら、たとえ精銳を誇っていても、第二百二十四師団と同様の運命をたどったであろう。

自ら老兵という、十五人の同志は、まさに老骨に鞭打って、歩兵第三十一連隊（弘前）出身の、体験者菊池政男氏の証言と、綏陽会 穴戸次夫氏の資料をもって、本文をまとめることができた。なお、穴戸氏は過般鬼籍に入られたことを聞き、御冥福を祈る。

星澤 記

蒙疆から河南まで

東京都 川村 傳

昭和十七（一九四二）年一月八日、私が入隊す